

# 筑波新大学創設からリニューアルそして再開発へ

尾原正芳

前施設部施設環境課課長補佐  
(おばら まさよし)

## 筑波新大学の創設期

昭和48年5月に設置された東京教育大学「筑波新大学創設準備室」に岡山大学から参加した準備室は施設系職員25名をはじめ、庶務・会計職員を含めて30数名でした。

当時陸の孤島と言われた筑波の乾燥したアカマツ林に建設する旧第一学群の現地調査では、現在の松美池はメタンガスがブクブク噴き出しており、2m位の棒を挿しても止まることもなく底なし沼を呈していました。

その時、旧第二学群あたりでススキに野火が移り、調査団はその消火に追われたいへんな思いもしました。

その夜、宿泊した本学の最北端に設けられた建設事務所で管理人の手によるドジョウ鍋をいただきながら全国から集まった若い仲間同士が「やってやろうではないか」と意を決したものでした。

大学の移転整備は、昭和45年度からはじまり当初計画が概成する56年度までに施設整備60万m<sup>2</sup>と250haの環境整備に約1200億

円（現在価約2000億円）の巨費が充当され、最盛期は49～50年度で369億円（現在価約560億円）であり、特に49年は第一次オイルショックの影響もあって物価高と資材及び労働者不足で工事は遅れ、質の低下をきたしました。

この年は年末差額支給がボーナスを上回る年でもありました。

このように研究学園都市の整備計画は、高度成長期に決定され、その波に乗った国家的プロジェクトでした。

この時期、施設部職員は90人を越える大所帯となり、工期に追われながらも活気にあふれた職場でした。

## 幻化している建設計画

マスタープランで計画された整備予定も当時の社会情勢等の影響もあって実現していないものもあり、将来いつか実現できることを願っています。

・体芸中央棟南ベデストリアンデッキ吹抜けに人工地盤の「憩いの芝生広場」

- ・中央図書館石の広場に「滝のモール」
- ・松美下池周辺保護緑地の自然を利用した「大学公園」「教職員クラブ」
- ・「芸術の森計画」開学記念館北側に茶室、占春池、ゲストハウスの計画
- ・その他「大学博物館」「屋根付グランド」など

## リニューアル計画

本学の創設期の施設整備は主に学群・学系の組織に対応してマスタープランされたものであり、その後改組・再編された現在の教育・研究組織に施設が対応できていない状況にあります。

また、新大学と言われた施設も一斉に老朽化が進行している状況にあって、創設期から建設に関った者として、その責任を感じており、今後計画的なリニューアルが行われることを期待します。

18年度から、文教施設整備費で耐震改修の補正予算が措置され、一部の施設について大規模改修が行われているが、本予算による継続的な予算措置が望まれます。

## 病院再開発計画

開院後31年を経て、本院は近年の医療に求められるニーズの変化と医療の急速な進歩及び医学教育の改革等、診療現場の環境は大きく変貌しており、30年前に整備され

た病院環境ではこれらに対応することが困難な現状となっています。

このため、「明日の医療・医学を創る力に」をコンセプトに掲げ、高度先進急性期病院に特化しつつ、地域全体としての理想的な医療環境を形成し、持続発展的な仕組みを創造する拠点としての教育・研究病院を造る病院再開発計画が進められています。

病院南側に地上12階、地下1階の新棟を増築し、既存棟についても改修を行う事業を民間事業者の創意工夫を活用して病院の建設・運営支援を包括するPFI事業として行うものです。

この再開発計画に定年までの2年間、再開発推進室の一員として関わったことに感謝するとともに本再開発事業の着実な実施を願っています。

## 最後に

公務員と法人職員として、筑波大学の創設準備から退職まで関わる事ができたことは一人の建築技術者としての達成感に満たされております。

これまで温かくご指導、ご厚誼いただきました学内全ての方がたに心からお礼を申し上げますとともに、本学の更なる飛躍と発展を祈念いたします。